Osaka Shoin Women's University Repository

保育者特性インベントリーの妥当化Ⅰ

心理学部　発達教育心理学科　藤村　和久

要旨：本論文は保育者特性インベントリィ（藤村、2010）を構成する、愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力、および養育性の７つの尺度の妥当性を検証することである。本研究において５つのグループが用いられた。これらは、現役の保育士および幼稚園教諭、保育士・幼稚園教諭養成課程学生、施設職員、女子大学系学生、共学大学の女子学生である。グループの平均値間の有意差検定の結果、論理的思考性を除いて、各尺度の弁別可能性が確認された。構造方程式モデリングを用いて、これらの尺度がサンプルを越えて同質性・一次元性が保たれていることが確認された。さらに、構造方程式モデリングを適用して、養育性の多重構造モデルの妥当性が確証された。最後に、個人の保育者特性プロフィールを査定するためのコンピュータプログラムが開発された。論理的思考性は、個人の保育者特性プロフィールを査定するに際して、人格構造的に重要な特性であることが確認された。

キーワード：保育士適性、幼稚園教諭適性、構造方程式モデリング、心理尺度の妥当性、質問紙法

【問題】

保育士、幼稚園教諭などの養成課程においては知識や技能といった技量（柳井、1975）の向上が教育の中心となっている。しかし、実際の保育や幼児教育の現場では、技量は勿論のことであるが、対象が乳幼児であるため保育者（保育士、幼稚園教諭など乳幼児の保育、教育に携わる者を以後保育者と呼ぶことにする）のパーソナリティ的要因の比重が大きいと考えられる。ところが、保育者の資質や特性の研究は散見される（浅見、2000；江田、2007；井澤・永房・星、2007；永房・井澤・岩切・星、2008など）が、保育者のパーソナリティ特性の測定尺度の構成や査定に関する研究は殆ど見当たらないのが現状である。このような問題を解決するために、藤村（2010）は保育者適合性に関するパーソナリティ特性（以降、保育者特性とよぶ）を分析的・総合的に査定するための測定尺度を構成した。その測定尺度は愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力、および養育性と名付けられた７つの尺度である。これらの測定内容はそれぞれ次の通りである。

愛他性尺度：見返りを求めることなしに他者の利益を重んじる行動傾向を表し、この尺度は利他性あるいは向社会性といった機会と重なる内容である。

共感性尺度：他者の感情や心理状態をあたかも自分のことのように感じたり、喜んだり、悲しんだり、心が痛んだりする傾向を表す尺度である。

論理的思考性尺度：勘に頼らず、感情に流されず、物事を多面的に考えたり、解らないことがあればそれを解ろうと努力し、事実や論理、あるいは普遍的な理論や法則性などを基準に物事を考え、理解し、主体的に自分の知識や認識を深めようとする傾向を表す尺度である。

気働き尺度：対人的行動に際して相手の心の状態、気持ちや動機など繊細に感じ取り、それらを受け容れようとする基本的態度であり、それ故に相手の気持ちに機敏に気配りをする傾向を表す尺度である。

社交性尺度：他者との交わりが、緊張や特別な心的エネルギーを必要としないで、気軽に、自然体で行われるかどうかといった傾向をあらわす尺度である。また、このような行動傾向は他者とあまりこだわりなく行われる傾向があり、人間関係の範囲も広くなるのが一般的である。

行動力尺度：よいと思うことをあまり躊躇することなく積極的に実行し、自分の恩いや考えを行動に移すことにためらわないといった決断力、実行力の多少を表す尺度である。

養育性尺度：子どもに対する思いの強さや、子どもの成長や発達のために子どもの世話をしたり、援助したり、子どもにとって自分がよい影響を及ぼそうとする傾向の強さを表す。

Osaka Shoin Women's University Repository

尺度構成は、保育場面での保育者の行動を説明すると考えられる16の構成概念を用意し、それらの構成概念がもつ心理機能を慣習的行動水準（Eysenck & Eysenck, 1969）の行動傾向として項目化し、類似性の高い項目群を合併して概念化し９つの概念に関する項目群を用意した。これを保育士、幼稚園教諭養成課程の学生373名に対して実施し、各項目の内容が「いつもの自分にどの程度当てはまるか」を５段階で回答を得た。グループ主軸法を用いて項目分析を行い、最終的に上記７尺度を得たものである。各尺度の一次元性・同質性がω係数（McDnald、1999）によって検証された。また、７つの尺度から養育性についての３要因構造モデルが提案され、そのモデルの適合性が確認された。

尺度構成は保育士や幼稚園教諭への動機をもち、進路選択にあたって保育士や幼稚園教諭としてのある程度の適合性があるとの自己評価を持っていると推察される養成課程の学生から得られたデータにより行われた。本研究の目的は、①現役保育士、現役幼稚園教諭、その他のサンプルとの弁別可能性を検討し、②養成課程学生のデータによって得られた各尺度の内的構造が他のサンプルデータに対して一般化できるか、③養育性に関する３要因構造モデルが他のサンプルデータに対しても一般化できるかを検証することにある。

さらに、尺度ごとに尺度得点のパーセンタイル値に基づき個人の当該尺度での位置を記すことによって個人の７尺度によるプロフィールを描き、個人の保育者特性を査定することを可能にする。個々の尺度得点の査定とともに、７次元空間における優秀な現役保育者の平均値からの汎距離を求め、個人の保育者特性プロフィールの適合性を確率で表すコンピュータ・プログラムを開発する。

【方法】

調査：藤村（2010）において構成された保育者特性に関する７つの尺度の項目をパラレルに配置した質問紙を作成し、現役の保育士（208名）、現役の幼稚園教諭（69名）、共学の女子学生（65名）、４年制女子大学の学生（98名）、短期大学学生（42名）、施設職員（44名）の協力によってデータを収集した。保育士、幼稚園教諭、施設職員に対する調査については、各園や施設に対して協力依頼を行い、許諾を得た園、施設に調査用紙を送付し、各施設において配布して結果を回収した。大学生に対する調査は、授業時間の最後15分ほどの間に実施した。調査の実施については、フェイスシートに「調査の結果は全て統計的に処理し、個人を特定できるような使用は一切行わない」旨を明記し、無記名で行った。また、調査に協力するかどうかは被験者の任意とした。

分析：

①上記６サンプル、すなわち現役保育士（208名）、現役幼稚園教諭（69名）、施設職員（44名）、４年制女子大学学生（98名）、短期大学学生（44名）と尺度構成のために実施した保育士養成課程の学生373名（藤村、2010）のサンプルを加えた７サンプル間の7尺度の平均値の差の検定をおこなった。

②７つのサンプル全ての組み合わせの平均値間の有意差を検定し、７つの尺度全てに有意差が認められないサンプルを合併する。

③合併されたサンプルの７尺度の平均値および標準偏差を算出し、さらに７尺度に関して新しいサンプル間の平均値の有意差を検定する。

③尺度構成のための分析（藤村、2010）において確認された各尺度の同質性がこれらサンプルにおいても一般化できるかを、共分散構造分析における多集団因子分析の測定不変モデル（豊田、2007）を適用することによって確認する。

④藤村（2010）によって提唱された養育性の３要因モデルが上記５集団においても一般化できるかを共分散構造分析の多集団配置不変モデル（豊田、2007）を適用することにより確認する。

⑤保育者特性プロフィールの作成。各尺度の全サンプル（$N=899$）における尺度得点のパーセンタイル値に基づく７つの保育者特性による個人プロフィールを作成する。

⑥現役保育者のサンプルから尺度ごとにサンプル平均値以上のサンプルを抽出し、その平均値を各尺度の保育者適合性の基準値として、個人プロフィールのこれら基準との距離を算出し、距離に対応する生起確率を算出し、これを保育者適合性確率とする。保育者適合性確率は、いま、７つの保育者適合性基準値からなるベクトルを$\boldsymbol{\mu}$、個人の７尺度得点から成るベクトルを$\boldsymbol{x}$、全サンプル899名の７尺度間の分散共分散行列の逆行列を $\boldsymbol{S}^{-1}$ とすると、$\boldsymbol{x}$の$\boldsymbol{\mu}$からの距離は

$$d^2 = (\boldsymbol{x}-\boldsymbol{\mu})' \boldsymbol{S}^{-1} (\boldsymbol{x}-\boldsymbol{\mu})$$

より求めることができ、このd^2が自由度７のχ^2分布に従う（奥野他、1971）ことを利用して、d^2の生起確率によって表し、これを保育者適合性確率とよぶこと

Osaka Shoin Women's University Repository

表１　サンプル別統計量

	養成課程学生	短期大学学生	共学大学女子学生	現役保育士	現役幼稚園教諭	施設職員	女子大学学生	全体
愛他性	18.847	16.381	16.323	19.389	19.087	17.773	17.571	18.50
	3.821	*6.518*	*5.821*	*3.423*	*3.480*	*3.436*	*4.814*	*4.243*
共感性	20.051	17.833	17.538	20.760	20.725	18.295	19.296	19.81
	4.571	*6.370*	*5.756*	*3.850*	*4.018*	*3.855*	*5.051*	*4.687*
論理的思考性	16.051	15.786	16.615	16.519	16.348	15.523	16.561	16.24
	4.869	*3.997*	*4.307*	*4.080*	*4.270*	*3.944*	*4.595*	*4.495*
気働き	17.496	16.333	15.092	17.106	17.464	14.227	16.459	16.90
	4.229	*6.131*	*6.307*	*3.957*	*4.178*	*4.579*	*4.546*	*4.575*
社交性	16.842	14.786	11.815	16.760	17.841	14.614	13.490	15.97
	5.624	*5.783*	*6.654*	*4.758*	*5.302*	*4.696*	*6.043*	*5.739*
行動力	16.241	14.952	13.169	16.870	17.449	15.545	14.592	15.98
	5.074	*5.310*	*5.647*	*4.382*	*4.928*	*3.732*	*5.533*	*5.068*
養育性	18.185	15.024	12.015	19.582	19.565	16.909	13.143	17.41
	4.074	*5.825*	*6.181*	*3.547*	*3.056*	*3.549*	*5.799*	*5.006*
N	373	42	65	208	69	44	98	899

にする。

【結果】

サンプル別の平均値、標準偏差は表１である。表中、イタリック表記された数値は標準偏差である。

７つのサンプルの平均値間の差の検定を各尺度について行った結果は次の通りである。

愛他性尺度

愛他性尺度については、現役保育士、現役幼稚園教諭および養成課程学生の間には本尺度において有意差がなかった。他方、施設職員、女子大学学生、短期大学生および共学女子学生間にも有意差がなかった。また、施設職員は現役保育士とのみ有意差が認められ、他のサンプルとは有意差がなかった。

共感性尺度

共感性尺度は、現役保育士、現役幼稚園教諭に有意差がない。現役保育士は養成課程学生と有意差があるが、現役幼稚園教諭は養成課程学生とは有意差が見られない。他方、施設職員、女子大学学生、短期大学生の間には有意差が認められない。また、女子大学学生は養成課程学生とは有意差がないが、共学女子学生とは有意差がある。

論理的思考性尺度

論理的思考性尺度は、７つのサンプルの全ての組み合わせにおいて有意差がなかった。

気働き尺度

気働き尺度は、現役保育士、現役幼稚園教諭および養成課程学生間には有意差がなかった。また、これら３サンプルは共に施設職員、共学女子学生との間に有意差が認められた。他方、女子大学学生、短期大学生および共学女子学生の間には有意差が認められない。また、施設職員は現役保育士、現役幼稚園教諭、養成課程学生および女子大学学生と有意差があるが、短期大学生と共学女子学生とは有意差がなかった。

社交性尺度

社交性尺度は、現役保育士、現役幼稚園教諭および養成課程学生間には有意差がなかった。また、これらの３尺度は他方、これら３サンプルは共に施設職員、女子大学学生、短期大学生および共学女子学生とは有意差が認められる。他方、施設職員、女子大学学生および短期大学生間には有意差がなかった。共学女子学生は施設職員と短期大学生との間に有意差がある。

行動力尺度

行動力尺度は、現役保育士、現役幼稚園教諭および養成課程学生間には有意差がなかった。他方、女子大学学生、短期大学生および共学女子学生の間には有意差が認められない。施設職員は現役幼稚園教諭と共学女子学生と間に有意差があるが、現役保育士、現役幼稚園教諭、養成課程学生および短期大学生とは有意差がない。また、本尺度では養成課程学生は女子大学学生、共学女子学生の間に有意差がある。

養育性尺度

養育性尺度においては、現役保育士、現役幼稚園教諭の間には有意差が認められないが、両サンプルは養成課程学生、施設職員、女子大学学生、短期大学生および共学女子学生との間に有意差がある。女子大学学生と短期大学生の間に有意差はなく、施設職員は短期大学生以外の現役保育士、現役幼稚園教諭、養成課程学生、施設職員、女子大学学生および共学女子学生と有意差がある。

２．サンプルの合併

Osaka Shoin Women's University Repository

表１のサンプル統計量に基づくサンプル間の平均値の差の検定結果から、現役保育士と現役幼稚園教諭の間には７つの全ての尺度平均値間に有意差がなく、女子大学学生と短期大学生の間も同様の結果であったことから、現役保育士と現役幼稚園教諭のサンプルを合併し、以降、現役保育者と呼び、また、女子大学学生と短期大学生を合併して女子大系学生と呼ぶことにする。

現役保育者、養成課程学生、施設職員、女子大系学生、共学女子学生のサンプルの平均値と標準偏差は表２のとおりである。表中、各尺度の上段は平均値、下段（イタリック）は標準偏差である。

次に、各尺度の合併サンプル間の平均値の有意差検定の結果が表３-１～表３-６である。表中、＜＜は１%水準、＜は５%水準での有意差を表し、空白は有意差なしを表す。たとえば、表３-１の左端の列のサンプル名と最上行のサンプル名との組み合わせで、左端列のサンプルが最上行サンプルより平均値が大か小かを表す。施設職員と現役保育者のセルに＜＜が記されているが、現役保育者の平均値が施設職員の平均値よりも高く、１%水準で有意であることを示す。

愛他性尺度

愛他性尺度は、現役保育者と養成課程学生との間には有意差がなく、この両群は施設職員、女子大系学生、共学女子学生に比べて有意に平均値が高い。また、女子大系学生は共学女子学生より有意に平均値が高い。この愛他性尺度は現役保育者および養成課程学生と他の女子学生との弁別力があるといえる。すなわち、本特性は保育者にとってその職業適合性を左右する重要な特性であるといえる。また、養成課程学生は自己の適性や関心を考慮して進路決定しているものといえ、その意味では目指す保育者に平均値が他のサンプルよりも近いことは、本尺度の妥当性を意味するもといえる。

共感性尺度

共感性尺度は、現役保育者が平均値が最も高く、他の全てのサンプルとも有意差がある。養成課程学生は施設職員、女子大系学生、共学女子学生よりも平均値が有意に高い。施設職員、女子大系学生、共学女子学生の間には有意差はない。この特性も、先の愛他性と同様に保育者にとってその職業適合性を左右する重要な特性であるといえる。藤村（2010）は、愛他性と共

表２　合併サンプル別平均値、標準偏差
（各行の下段イタリックは標準偏差）

尺　度	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
愛他性	19.314 *3.426*	18.847 *3.821*	17.773 *3.436*	17.214 *5.386*	16.323 *5.821*
共感性	20.751 *3.885*	20.051 *4.571*	18.295 *3.855*	18.857 *5.498*	17.538 *5.756*
論理的思考性	16.477 *4.121*	16.051 *4.869*	15.523 *3.944*	16.329 *4.424*	16.615 *4.307*
気働き	17.195 *4.009*	17.496 *4.229*	14.227 *4.759*	16.421 *5.051*	15.092 *6.307*
社交性	17.025 *4.911*	16.842 *5.624*	14.614 *4.696*	13.879 *5.975*	11.815 *6.654*
行動力	17.014 *4.522*	16.241 *5.074*	15.545 *3.732*	14.700 *5.450*	13.169 *5.647*
養育性	19.578 *3.426*	18.185 *4.073*	16.909 *3.549*	13.707 *5.850*	12.015 *6.181*
N	277	373	44	140	65

表３－１　愛他性尺度の合併サンプル間の平均値の有意差

	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
現役保育者			＞＞	＞＞	＞＞
養成課程学生			＞	＞＞	＞＞
施設職員	＜＜	＜			
女子大系学生	＜＜	＜＜			＞
共学女子学生	＜＜	＜＜		＜	

Osaka Shoin Women's University Repository

感性は情緒的受容性因子を構成する特性で、情緒的受容性因子は保育・養育行動の基本的要因とするモデルを確証したが、サンプルの平均値の比較の結果はそれを反映するものといえる。

論理的思考尺度

論理的思考性尺度は全てのサンプル間に有意差は見られなかった。この尺度が目的とする測定内容は知的な行動傾向であり、保育者あるいは保育者養成課程学生か否かといった本調査におけるサンプル間においては違いが出なかったものといえる。しかし、このことがすぐ本尺度の有用性を否定するものではない。何故なら、後に述べるように、パーソナリティ構造上、個人の保育者特性プロフィールの査定において、本尺度が重要な役割を担うからである。

気働き尺度

気働き尺度は、現役保育者と養成課程学生との間には有意差はなく、他方、女子大系学生は現役保育士および共学女子学生との間にも有意差がない。現役保育者は愛他性、共感性、社交性、行動力、養育性の各尺度は平均値の大きさのサンプル間の順序性という点では最も高い値を示すが、気働き尺度は養成課程学生に次いで２番目である。養成課程学生は最も平均値が高く施設職員、女子大系学生、共学女子学生とそれぞれ有意差がある。

社交性尺度

社交性尺度は現役保育者と養成課程学生との間には有意差が見られないが、これらのサンプルは共に施設職員、女子大系学生、共学女子学生とは有意差がある。本尺度も女子大系学生、共学女子学生に対して弁別力を有するものといえる。

行動力尺度

行動力尺度は現役保育者が最も高い平均値を示し、他の養成課程学生、施設職員、女子大系学生、共学女子学生との平均値差が有意である。乳幼児を対象とする仕事柄、刻々と変化する状況の中で子どもにとって良いと思うことを躊躇なく積極的に実行し、自分の恩いや考えを実行しようとする主体的な行動傾向が強く反映されていると考えることができる。保育者を目指す養成課程学生は授業や実習経験によって行動力、実行力を身につけている様子がうかがえる。しかし、現役の保育者にはまだ及ばない状態であるが、養成課程でない女子大系学生、共学女子学生よりは平均値が有意（１％水準）に高いといえる。女子大系学生と共学女子学生との間には有意差がない。

養育性尺度

養育性尺度は、現役保育者の平均値が最も高く、養

表３－２　共感性尺度の合併サンプル間の平均値の有意差

	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
現役保育者		>	>>	>>	>>
養成課程学生	<		>	>	>>
施設職員	<<	<			
女子大系学生	<<	<			
共学女子学生	<<	<<			

表３－３　気働き尺度の合併サンプル間の平均値の有意差

	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
現役保育者			>>		>
養成課程学生			>>	>	>>
施設職員	<<	<<		>	
女子大系学生		<	>		
共学女子学生	<	<<			

表３－４　社交性尺度の合併サンプル間の平均値の有意差

	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
現役保育者			>>	>>	>>
養成課程学生			>	>>	>>
施設職員	<<	<			>
女子大系学生	<<	<<			>
共学女子学生	<<	<<	<	<	

Osaka Shoin Women's University Repository

成課程学生、施設職員、女子大系学生、共学女子学生と１％水準で有意差がある。養成課程学生が次に続き、施設職員、女子大系学生、共学女子学生と有意差がある。女子大系学生と共学女子学生との間には有意差が見られない。本尺度は、子どもに対する思いの強さや、子どもの成長や発達のために子どもの世話をしたり、援助したり、子どもにとって自分がよい影響を及ぼそうとする傾向の強さを表すことから弁別可能性を有するといえる。

尺度の同質性の確証

保育者特性尺度の構成において尺度の同質性・一次元性が各尺度図１の尺度項目の確認的因子分析によって確認された（藤村、2010）。本研究では、本研究で収集した現役保育者、施設職員、女子大系学生、共学女子学生のサンプルにも一般化できるかを共分散構造分析によって確認する。多母集団因子分析の測定不変モデルの等値制約のもとに５つのサンプルを同時分析した結果が表４である。表４は、尺度ごとに図１のモデルを適用し、上記５つのサンプルを超えて各尺度の同質性、一次元性がどの程度保持されているかの目安としてモデル適合指標のGFI、RSMEAによって示したものである。なお、図１における保育者特性は各尺度の尺度名、項目１～項目７は各尺度の７つの尺度項目を表す。

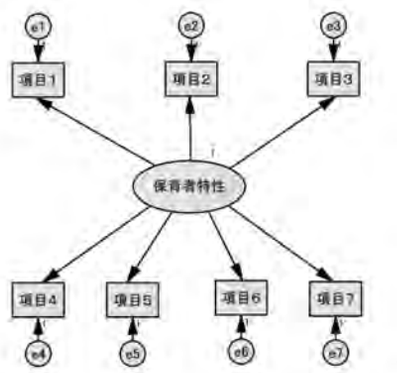

図１　尺度項目の同質性の確認

表３－５　行動力尺度の合併サンプル間の平均値の有意差

	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
現役保育者		＞	＞	＞＞	＞＞
養成課程学生	＜			＞＞	＞＞
施設職員	＜				＞＞
女子大系学生	＜＜	＜＜			
共学女子学生	＜＜	＜＜	＜＜		

表３－６　養育性尺度の合併サンプル間の平均値の有意差

	現　役 保育者	養成課 程学生	施設職 員	女子大 系学生	共学女 子学生
現役保育者		＞＞	＞＞	＞＞	＞＞
養成課程学生	＜＜		＞	＞＞	＞＞
施設職員	＜＜	＜		＞＞	＞＞
女子大系学生	＜＜	＜＜	＜＜		
共学女子学生	＜＜	＜＜	＜＜		

表４　多母集団因子分析によるモデル適合度

尺　度	GFI	RSMEA
愛他性	0.917	0.049
共感性	0.941	0.036
論理的思考性	0.952	0.030
気働き	0.893	0.058
社交性	0.945	0.032
行動力	0.917	0.044
養育性	0.938	0.036

Osaka Shoin Women's University Repository

各尺度とも良好な適合度が得られているといえる。したがって、各尺度の尺度項目はサンプルを越えて同質性、一次元性が保持されているものといえる。

養育性の３要因構造モデルの検証

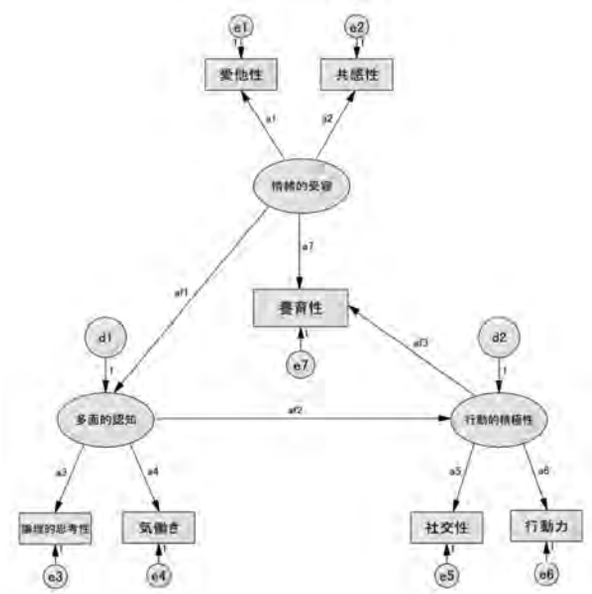

図２　養育性の３要因構造モデル

図２は７つの保育者特性間の構造的関係を藤村（2010）によってモデル化されたものである。本研究において用いた５つのサンプルに対しても一般化できるかを共分散構造分析による多母集団分析を適用して検証した結果、モデル適合度がGFI=0.960、RMSEA=0.041であった。これらのモデル適合度から、各集団サンプルに対しても本モデルが一般化できるものと考えられる。

保育者特性プロフィールに表れるパーソナリティの特徴

具体的な個別プロフィールの例を図３-１～図３-６に示す。プロフィールの最上段は標準点を表す。全サンプル899名の各尺度の得点分布から、尺度得点のパーセンタイル値を求め、尺度得点が$0 \leq p \leq 7$％の範囲を標準点１、$7 < p \leq 31$％を標準点２、$31 < p \leq 69$％を標準点３、$69 < p \leq 93$％を標準点４、$93 < p \leq 100$％を標準点５とした。次の段の１～99はパーセンタイル値である。＊は尺度得点の位置、@は現役保育者サンプルの内、平均値以上の現役保育者の平均値の位置である。

プロフィール例１＜図３-１＞

このプロフィールは、愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力および養育性の各尺度に高い得点を有し、情緒的受容性が強く、多面的認知および行動的積極性においても強い傾向を示し、図２の養育性の３要因構造モデルを十分に満たしうる保育者として高い適合性をもつものと判断できる。

プロフィール例２＜図３-２＞

このプロフィールは愛他性、共感性、論理的思考性、気働き、社交性、行動力および養育性の全尺度に

図３－１　プロフィール例１

Osaka Shoin Women's University Repository

おける得点が標準点に換算して２ないし１で、情緒的受容性、多面的認知、行動的積極性の各要素において非常に弱い。

プロフィール例３＜図３-３＞

論理的思考性、気働き、行動力尺度の得点が非常に高く、愛他性、共感性、社交性および養育性尺度の得点が非常に低いというはっきりしたプロフィールである。このプロフィールは、愛他性、共感性、養育性といった情緒的受容性が非常に弱く、社交性が弱い。いろいろなことが気になりあれこれ頭で考え込んでしまうが社会的脈絡の中での指向性が乏しいといえる。また、行動力得点は高いので、この行動力が独善的になりがちな人格像である。

プロフィール例４＜図３-４＞

このプロフィールは、愛他性、共感性、養育性得点が極めて高く、気働き、社交性、行動力尺度も非常に高い得点をもつ。その反面、論理的思考性尺度は標準点２で低い水準にある。７つの保育者特性はその傾向

図３－２　プロフィール例２

図３－３　プロフィール例３

Osaka Shoin Women's University Repository

が強いほど保育者として望ましいと考えられがちである。ところが、本プロフィールは情緒的受容性、行動的積極性が共に非常に強く、論理的思考性が低いことが、時として情緒的側面の強さが即行動に結びつくといった短絡的な行動図式になる可能性が非常に高い。

プロフィール例５＜図３-５＞

このプロフィールは、共感性が弱く、論理的思考性、養育性が高い得点を持ち、他の尺度得点は平均的である。共感性といった他者の感情や情緒の易感性といった気質的特性における弱さを、保育者とはこうあるべきだという知性で養育的行動を支えているパーソナリティ像を表しているものと考えられる。

プロフィール例６＜図３-６＞

このプロフィールは、共感性がやや強く、社交性、

図３－４　プロフィール例４

図３－５　プロフィール例５

Osaka Shoin Women's University Repository

図３－６　プロフィール例６

行動力、養育性がやや弱い。他者の感情や気持ちを共感することができ、役に立とうとする気持ちや気配りも人並みにできるが、それを相手に表現することにエネルギーを要し、また子どもや立場の弱い人に対して世話を惜しまず労力を注ぐといった行動に欠け、行動力・実行力に欠けるといったパーソナリティ像である。

【考察】

本研究の目的は、保育者特性尺度の保育者適合性に関する弁別可能性の確認、尺度項目の同質性・一次元性の一般化の確認、養育性の３要因構造モデルの一般化の確認および保育者特性に関する個人プロフィールとその査定、総合的な保育者適合性の査定のためのコンピュータ・プログラムの開発であった。

尺度の弁別可能性について、論理的思考性尺度は全てのサンプル間に有意差がなかったが、これについては後述し、まず論理的思考性尺度以外の尺度について考察する。

現役保育者と養成課程学生とは、共感性尺度、行動力尺度、養育性尺度において有意差があり、愛他性尺度、気働き尺度、社交性尺度においては有意差がなかった。また、現役保育者と養成課程学生は共に施設職員、女子大系学生、共学女子学生の各サンプルに対して論理的思考性尺度以外の尺度に有意にその平均値が高かった。ただし、気働き尺度における現役保育者と女子大系学生との間に有意差はみられなかった。これらのことから、総じて現役保育者、養成課程学生と女子大系学生、共学女子学生との間に各尺度の弁別可能性が確認されたものと考える。

各尺度の同質性・一次元性に関しては十分な水準（表４）といえる。また、養育性の３要因構造モデルに関してもモデル適合性が確証された。このことによって各尺度がサンプルを越えて測定内容の同質性が保持され、尺度間の構造的関係も保持されていることが明らかになった。このことによって、保育者特性尺度による個人プロフィールの査定が可能である。

論理的思考性尺度が全てのサンプルの組み合わせにおいてその平均値に有意差がなかったことは先述のとおりである。しかしながら、このことが本尺度の妥当性を否定するものでは決してない。むしろこの尺度はパーソナリティ構造上の必要性から保育者特性の一つとして構成したものである。図３-３のプロフィール例は、よくあれこれ考える傾向が非常に強く、対人的な感受性が非常に強く、行動力が強い反面、社会的関係に重要な働きを持つ愛他性、共感性といった情緒的人格機能が弱く社交性に乏しいといった人格像である。いわば、自己完結的な行動傾向が強いといえる。図３-４のプロフィール例は情緒的傾向が非常に強く、それが直接的に行動に結びつくといった人格像である。また、図３-５のプロフィール例は情緒性や行動力において目立った傾向が見られないが、論理的思考性と養育性の強さで保育者としての適合性を保っているという

Osaka Shoin Women's University Repository

人格像である。言い換えれば、保育者としてのあるべき姿をいろいろ考え、自己の保育者像を形成して養育的行動として具現化していると考えられる。これも一つの保育者としての適合的姿を表しているものといえる。これらのプロフィール例から明らかなように、論理的思考性は人格構造上重要な機能を担っているものといえる。

また、個人のプロフィール例（図３－１～図３－６）からも図２に示した養育性の３要因構造モデルの有用性が明らかになったものと考える。

【引用文献】

浅見　均（2000）. 保育者の資質に関する一考察　青山学院短期大学紀要、**54**、121-150。

Byrne, B. M. （2001）. *Structural Equation Modeling with AMOS.：Basic Concepts, Applications, and Programming*. Lawrence Erlbaum.

Bollen, K. A.（1989）. *Structural Equations with Latent Variables*. Wiley.

江田美代子（2007）. 保育士に求められる資質能力に関する調査研究　宮崎女子短期大学、**34**、31-46。

Eysenck, H. J., & Eysenck, S. B. G.（1969）. *Personality Structure and Measurement*. Routledge & Kegan Paul.

藤村和久（2010）. 保育士、幼稚園教諭を目指す学生のための保育者適性尺度の構成　大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要、**9**、129-143。

井澤永修・永房典之・星　道子（2007）. 保育者適性尺度作成の試み　東京文化短期大学紀要、**24**、5-10。

McDnald, R. P.（1999）*Test Theory: A Unified Treatment*. University of Illinois at Urbana-Champain.

永房典之・井澤永修・岩切信一郎・星　道子（2008）. 保育者適性に関する研究（２）－Big Five 性格と個人・社会志向性からの検討－　東京文化短期大学紀要、**25**、1-3。

奥野忠一・芳賀敏郎・久米　均・吉澤　正（1971）. 多変量解析法　日科技連出版社。

豊田秀樹（1998）. 共分散構造分析－構造方程式モデリング－［入門編］朝倉書店

豊田秀樹編著（2007）. 共分散構造分析－構造方程式モデリング－［Amos編］　東京図書

Validation of the Nursery Trait Inventory I

Osaka Shoin Women's University Faculty of Psychology Department of Developmental and Educational Psychology

Kazuhisa FUJIMURA

Abstract

The purpose of this paper is to confirm the validity of the seven nursery trait scales of altruism, empathy, logical thinking, responsiveness, sociability, power of action, nurturing that make up the Nursery Trait Inventory (Fujimura, 2010).

Five sample groups were used in this study. These groups were nursery and kindergarten teachers, kindergarten and nursery school student majors, nursery home staff, female students in a women's university, and female students in a co-ed university.

Testing significance of difference between the means of the five group of samples proved that these scales except the logical thinking scale could distinguish between these groups. It was confirmed by applying structural equation modeling that each scale had homogeneity and unidimensionality across samples respectively. Furthermore, by applying structural equation modeling, validity of the three factors structural model of nurturing behavior (Fujimura, 2010) is confirmed. Finally, a computer program to assess individual profiles of nursery traits was developed.

It was confirmed that the logical thinking scale was important in personality structure for assessing an individual's nursery trait profile.

Keywords: aptitude of nursery teacher, aptitude of kindergarten teacher, structural equation modeling, validity of psychological scale, questinaire method